

## 2009年12月 日本民具学会大会（京都造形大学）参加記念 棕櫚の道具を商うー

栗国恭子

12月5.6日の両日、京都造形大学で開催される日本民具学会へ参加するために京都を訪れた。紅葉の季節も終りの時期ということもあって、晩秋を楽しむため京都は、観光客も多く…。



三条河原町通本能寺裏に宿を取った。そこから歩いて数分のところに内藤商店はある（内藤商店：・京都市中京区三条大橋西詰 電話 075-221-3018 営業9時30分～19時 無休）。

京都に出向いた際には立ち寄りたいたと、以前から思っていた店の一つ。

「内藤商店」は、文政元年（1818）創業で、棕櫚の繊維で作った箒や切りわらなどの道具を商う店。三条大橋近くの店の隣には、高瀬川が流れている。繁華街に近いこの付近は、グローバル化された現代の街並の典型的な風景にありがちなスターバック珈琲やミスタードーナツ、全国チェーンの居酒屋、イタリアンレストランが立ち並び、その中にはなぜかインド料理屋が目立つ。行きかう人も地元の人や若者たちも多い。高瀬川沿いの先斗町あたりやちょっと筋道にはいらないと意外に京都の町家らしい雰囲気はない。

こうした時代変化の激しい地区に、内藤商店は、創業から200年近い年月で商いをしており、しかも棕櫚製の道具専門店という特殊な商品の店である。その存在を知って4.5年ほど経つが今日まで商いが続いているのかどうか（不謹慎だが）と思っていた。

店舗には看板らしいものもかかっていない。京都の滞在中毎日のように立ち寄ったが、その時にも商いに忙しい雰囲気でもない。

まずは、商っている道具の紹介から。

写真 資料の上から\*魔法瓶やガラスの内側を洗うのに便利な**ロング切りわら**（2100円）、\*茶釜用**釣り鐘切りわら**（3000円）

\*一番柔らかい**切りわら**（1300円）、\*キーボードの掃除にもいい**荒神箒**（2500円）、「キーボードの掃除にもいい」という説明は現代用のコメントであろう。以前は文机・陶器やその他飾り物に使用していた

棕櫚のやわらかい繊維を使った小型の箒である。\*食器洗い用切りわら（1500円）

写真 資料<長柄箒>も店頭にかけられ長さ122cmと約70cmの二種類があった。

\*長柄**鬼毛箒**7つ玉（糸締め）1万4600円

\*長柄**鬼毛箒**11玉（2万円）

\*長柄**フローリング用**7つ玉（1万円）

いずれの道具も茶色の棕櫚の繊維を丁寧に梳かし、先を切りそろえ細い銅線（中には糸締め）で締めている。

棕櫚の箒には、2種類あり鬼毛箒は硬めの皮の繊維で置向き。フローリング用にはもっと柔らかい繊維を使用。サイズは幅が狭い順から7つ玉、9つ玉、11玉。繊維をまとめた束で呼ぶ。7つ玉は繊維の束が7つ。江戸時代から変わらない<用即美>の素材と形。

棕櫚の繊維は、一見（イメージ）して硬そうに見えるが、触れてみると<硬め>に仕上げた道具でも実に手触りがいい。思ったよりも棕櫚の繊維は、しなやかで柔らか



写真



写真

い。その繊維一本一本が畳の目に入り込み、埃やごみを掻き出す。フローリングの表面も傷つけないし、畳表や床の表面につやさえ出てくるそう。フローリングというのは今風な呼び方であるが、ようするに板間である。また、歴史の長い宗教都市の機能を持つ京都の多くの寺の掃除や貴重な仏像の煤払いにも棕櫚の箒は使用されてきたという。

数多くの寺院や保存活動で意識的に残された木造の町屋の存在が、この内藤商店をささえているのかもしないとおもった。

切りわらや箒の他に、鴨居用の箒、障子張りなどに使用する刷毛などなど...の商品が置いてある。店内の多くのスペースに置かれていた、バスマット用の敷きマット（玄関マット？）と動物のオブジェ（大型）が気になったが、現代の生活にあわせて作られたのだろう。



丁寧なつくりの美しい長柄の箒もほしかったが、今回記念に購入したのは、  
\* 食器洗い用切りわら小 900 円（長さ 11cm、直径 2cm）  
\* おろし金用の切りわら 500 円（長さ 7,2cm、直径 0,6cm）  
\* たわし中 350 円（長さ 10cm 幅 8cm、高さ 4cm）  
\* たわし小 200 円（長さ 7cm、幅 6cm、高さ 3cm）の

4 点。値段も日用品としては高くない。

現在の店主・6 代目内藤幸子（73：2009 年段階）歳は、「使い終わったらよく乾かすことが長もちする秘訣。丁寧に使えば 1 本の箒が 30 年くらいは持ちます」と購入の際に話くれた。しかし、30 年という表現は、本当かどうかはわからない。結構長持ちする道具のよう。

寒い京都では棕櫚の繊維が手に入るのか疑問に思い聞いてみたところ、和歌山の棕櫚で、商品によっては、手造りのため入荷まで 1 年待ちの状態もあるとか...

沖縄にもどり、日頃使用している棕櫚たわしと比較してみる。まず棕櫚の繊維の密度（使用本数）が多い。繊維を梳き整える段階で均一の長さに切られ、針金にはさみこんでひねると亀の甲羅のような曲線が生まれるという具合。シンプルなつくりといえばシンプル。繊維の密度が高いが手触りは柔らかい。肌に当ててみてもさほど痛みも感じない。

100 円ショップなどに売っている亀の子たわしは、繊維も堅く、繊維の太さも揃っておらず使用している繊維も少ない。たわしを使うものにあたる繊維が少ないので汚れを落とすのに何度もこすることが必要になってくる、結果サイズ的には同じような大きさのたわしではあるが繊維も抜けやすく、1 年も使用に耐えない。現在流通しているのは国内産でなく東南アジア産（確認をとったわけではないが）と思われる。暑い場所で育つ棕櫚も繊維が堅くて丈夫ってことか???

値段の 100 円～200 円の違いに多くの手間の違い？感覚の違いを確認した。

内藤商店の日用品の安価なたわしは、料理人だけでなく庶民にも根強いファンは多いのではないだろうか。

しかし、老夫婦で商うこの店もあと 10 年後は、京都の街で商いを続けているだろうか？観光地の京都の土産で生き残る工芸品や菓子やつけものとは需要が違う。製造元の和歌山の事情もあり...なかなか残るのは難しいのではないかと思う。

購入した道具が、30 年とはいかないが 3 年くらい使用状況を観察しつつ、内藤商店を思い出すことにしよう。

以上、京都で棕櫚道具を商う「内藤商店」(2009)の紹介でした。

\*写真について、写真 写真は雑誌『サライ』(小学館 2003 年 19 号『サライ』p119 (編集発行：東直子、第 15 巻 20 号通巻 344 号))より、以外の写真は栗国恭子撮影。